

音楽表現力を引き出す伴奏付け指導メソッドの構築

～授業実践を振り返って～

山 岸 徹

1. はじめに

筆者は、これまで多くの授業を通じて伴奏付け指導を重ねてきて一定の効果を見出すことができたと考えている。子どもたちが音楽表現や身体表現の活動をする上でピアノ伴奏は重要な役割を果たす。楽譜どおりに弾くことができる能力は重要だが、既成の楽譜にとらわれずに半ば即興的にピアノ伴奏をすることができれば保育・教育の現場においてさらに大変有用である。そのような能力は、歌の伴奏以外にも音楽に合わせて子どもたちが体を動かすことや音楽によって子どもたちがイメージを膨らませることなど、様々な場面でも応用できる。また、伴奏付けの方法に関する基礎的な知識は既成の楽曲を簡易伴奏で弾くためのヒントともなり、ピアノ初心者にとっても活用できる範囲が広い。

本稿は筆者が授業実践を通じて行ってきた伴奏付け指導の方法をメソッドとしてまとめ、その概要を記載するものである。指導方法や取り扱う楽曲は筆者自身の自己反省に基づいてつねに見直しながら進めているため少しずつ変化してゆくが、本稿執筆時点での姿をまとめている。その効果の実証については今後の課題となる。

2. 伴奏付け指導メソッド開発の経緯

筆者は、1985年から2003年まで当時の本務先であった奈良文化女子短期大学音楽学科において「ソルフェージュ」などの授業内で伴奏付けの内容を取り扱ったが、これはおもにヤマハやカワイのグレード試験を受けるための対策、さらには直接の就職対策としての意味が強かった。わが国の音楽教育を俯瞰すると、伴奏付けの個人指導に関しては、従来楽器メーカーが関係した音楽教室が重要な役割を担ってきており、当時の音楽学科の学生にとっては、卒業後そのような場での指導者となるということが就職先として重要な選択肢であった。そのような目的から、授業以外でも楽器メーカーから指導スタッフを招いて就職試験対策のためのガイダンスを開催することもあった。当時の授業において筆者は、独自の教材よりもおもに各メーカーが開発したテキストに基づいて授業を進めていた。

その後本学に赴任し、幼児教育学科において「音楽理論」や「音楽理論特講」といった授業を前任者から引き継いで担当するに至った。本学で開講されているそれらの授業内で伴奏付けを取り扱う目的は就職試験対策というよりも、より実質的、本質的なものと考え

られた。本学においては大部分の学生が保育者になるとの明確な目標を持っている。将来現場に出たときに保育者として子どもたちの音楽表現力を引き出すための技量を持っていることが大切であり、そのことを最優先の目標として授業を進めた。一方において基本的な音楽面での知識や技術といった力量は音楽学科学生とは異なっていた。そのような状況において、前任校での指導活動経験を参考にするものの、より本学に適した内容の構築が急務となった。

その後、本学におけるカリキュラムの変遷とともに筆者の担当授業科目や履修学生数も変化していった。そのような流れから、伴奏付けの指導内容も取捨選択を繰り返しながらより効果的なものとするために改良を重ねてきた。教材として使用する楽曲の選定にあたっては、可能な限り実際の保育現場での使用に役立つものとするよう配慮した。

3. 伴奏付け指導メソッドのプロセス

本稿執筆時点での伴奏付け指導のプロセスは表1に示すように6段階に及ぶ内容である。各段階で代表的な子どもの歌を課題として取り上げて伴奏付けの方法を楽曲ごとに分かりやすく提示するが、最終的には受講者が任意の楽曲のメロディーを独力で伴奏付けできるようになることを目指している。

執筆時において本メソッド全体としては10コマ以上の授業時数を要する内容であり、

表1：伴奏付け指導メソッドのプロセス

	基礎演習	応用演習	本稿における譜例
第1段階	主和音 (I) と属和音 (V) の定型の連結による伴奏付け練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 弾き歌い ・ 歌唱指導 ・ 両手による伴奏 (右手でメロディーを弾かない) ・ 属七の和音を含む伴奏付け ・ 代用的な和音進行を含め伴奏付け Ⅱ 第1 転回形 - I 第2 転回形 - V7 - I 	<p>譜例1： 「ぶん ぶん ぶん」 (ハ長調)</p> <p>譜例2： 「かっこう」 (ハ長調)</p>
第2段階	与えられたベースラインに基づき和音進行の骨子を作る練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ 打楽器による簡単なリズム譜を加筆し、伴奏・歌と合わせて打楽器を加える。簡単な合奏譜を作る。 	<p>譜例3： 「森のくまさん」 (ハ長調)</p> <p>譜例4： 「森のくまさんで使用するコード」</p>
第3段階	へ長調の楽曲の伴奏付け	<ul style="list-style-type: none"> ・ 両手による伴奏 (右手でメロディーを弾かないかたち) も含め、何種類かの伴奏を作る。 	<p>譜例5： 「山の音楽家」 (へ長調)</p>
第4段階	ト長調の楽曲の伴奏付け	<ul style="list-style-type: none"> ・ 副三和音 (II, VI) を用いる練習 	
第5段階	非和声音についての理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ モチーフ、小楽節、大楽節などの用語とともに、二部形式の楽曲構造を理解する。 	<p>譜例6： “Long Long Ago” (ト長調)</p>
第6段階	和音の機能についての理解	<ul style="list-style-type: none"> ・ 「トニック」、「ドミナント」、「サブドミナント」によるカデンツの成り立ちについての理解。 	

筆者が担当する「音楽理論」と「作曲法基礎」の二つの授業にまたがって取り扱っており、それらの授業内容の根幹を成すものとなっている。それぞれの授業全体としての具体的な構成は次のような流れとなる。「音楽理論」においては、基礎的な記譜法の確認から始め、和音などを理解させた上で伴奏付けの本メソッド前半に至る。「作曲法基礎」においては、本メソッドの後半から始め、本メソッド終了後、最終的には受講者全員がピアノ伴奏の付いたオリジナル曲を作曲するに至る内容である。

本メソッドに基づいて授業を行う際には以下の譜例に示すような教材資料を課題として配布する。それらは受講者自身が指示に従って楽譜を作成し、書き込むことができるように工夫している。以下の譜例における空白小節は、受講生自身が記入するためのスペースである。本メソッドにおいては弾くだけでなく、楽譜を書くことも重視している。楽譜を書くことによって細かな部分もていねいに仕上げる習慣をつけるとともに、受講者自身が発想した音楽を記録して残すことができるように意図している。仕上げた楽譜はその都度提出させ、添削して返却する。また、学期末には仕上げたすべての楽譜を綴じて再度提出させ、返却する。そのようにして完成した楽譜を将来受講者自身のための貴重な参考資料、または「曲集」として活用してほしいと考えている。授業においては、弾くことと楽譜を作成する作業とをいつも平行して行えるように配慮している。また、弾く際のミスタッチを避けるため、それぞれの課題のメロディーには運指番号を記載している。

なお、本稿に掲載する譜例はすべて筆者自身が楽譜作成ソフト“finale 2012 for Mac”によって作成したものである。授業の教材作成にも活用しているが大変効果的である。

また、本学にはミュージックラボラトリー・システム (ML) の設備がないため、ポータブルのキーボードを受講者の人数分用意し、毎時間一人ずつ楽器庫から取り出して使用させている。

以下、本メソッドの各段階の指導内容と方法を記述する。

3. 1. 第1段階

簡単なハ長調の楽曲に主和音 (I) と属和音 (V) の定型のみを用いて伴奏付けする方法を指導する。

・「ぶん ぶん ぶん」(譜例 1)

- (1) まず受講者全員でメロディーを一緒に歌う。
- (2) <ド・ミ・ソ>と<シ・レ・ソ>の2種類の和音のみを「定型」として使用する。
与えられたベースライン上に適切な和音を選び「和音進行の骨子」を記入する。

このベースラインに基づいて和音を選ぶ方法は伝統的な「数字付き低音」の方法に則っている。本授業において使用する教材では、伝統的なローマ数字による和音

記号とコードネームの2種類のスタイルによる表記を併用するが、煩雑になることを避けるため転回形和音を区別する表記は用いていない。

- (3) 各自で右手のメロディーを弾きながら左手で2種類の和音のみの「定型」による「和音進行の骨子」を弾く練習をする。
- (4) 「和音進行の骨子」に基づき、各自で左手部分のリズムを自由に変化させて伴奏を作る。

譜例1：「ぶん ぶん ぶん」

●左手の伴奏（右手でメロディーを弾くかたち）

●和音進行の骨子 ~以下同様に、ベースライン上に音符を加筆する。

譜例2：「かっこう」

●左手の伴奏（右手でメロディーを弾くかたち）

~以下同様に記入する。最初から別の音形にしても良い。

●両手による伴奏（右手でメロディーを弾かないかたち）

~以下同様に記入する。最初から別の音形にしても良い。

●和音進行の骨子 ~以下同様に、ベースライン上に音符を加筆する。

注) この小節は属七和音のみで伴奏付けできる。

・「かっこう」(譜例 2)

(5) 前掲 (1) から (4) の方法に基づき左手伴奏を作り演奏する。主和音 (I) と属和音 (V) 以外に属七の和音 (V7) を含む練習である。

(6) 両手による伴奏 (左手メロディーを弾かないかたち) を考え、楽譜を完成する。

子どもたちがメロディーを覚えて歌えるようになった後は、ピアノではメロディーを重ねて弾かずに伴奏することで子どもたちがより自由にのびのびと歌うことができ効果的である場合が多いことを説明する。また、そのような理由により本メソッドにおいては各段階においてメロディーを重ねて弾かない両手による伴奏を重視している。また、それぞれの受講者が作成する伴奏は、各自の演奏能力に応じた内容で良いことを説明する。

(7) 以上のようなプロセスを経て仕上げた各自の楽譜を使用し、受講者が順次実際に伴奏を分担してゆき、他の受講者は歌う。そのような練習は、実際の伴奏の経験として役立つ。

この段階において受講者自身が音を選んで伴奏を作ることの楽しさを感じるように促すことが大切である。多くの受講者は、自分自身が作ったオリジナルの伴奏によって実際に他の受講者が歌うことを体験し、新鮮な喜びを感じる。また、そのことが次の段階へ進むための原動力ともなる。

3. 2. 第 2 段階

与えられたベースラインに基づきハ長調の楽曲の和音進行の骨子を作る方法を指導する。ハ長調の主要三和音 (I、IV、V) と属七の和音 (V7) を使用する。

・「森のくまさん」(譜例 3)

(1) まず受講者全員でメロディーを歌う。

(2) ベースライン上に適切な音符を加筆し「和音進行の骨子」を完成する。使用する和音は譜例 4 に揚げた 5 種類の和音の中から適宜選択する。この課題では例外的に「借用和音」(この場合は下属調の属七の和音) を含んでいる。

(3) 右手でメロディーを弾きながら左手で「和音進行の骨子」を弾く。

(4) 「和音進行の骨子」に基づき自由なリズムで左手伴奏を作り演奏する。

(5) さらに進んで、打楽器パート (大太鼓、小太鼓など) を加筆し、チームを作って歌とピアノに合わせて演奏する。

(6) 譜例には記載していないが、両手による伴奏 (左手メロディーを弾かないかたち) も考え、弾く練習をする。また、必要に応じて楽譜も作成する。

譜例3：「森のくまさん」

●左手の伴奏（右手でメロディーを弾くかたちの例）

●打楽器のパート

小太鼓
大太鼓

～以下同様に記入する。最初から別の音形にしても良い。また、他の打楽器を選んでも良い。

●和音進行の骨子

～以下同様に、ベースライン上に音符を加筆する。

注) この部分では借用和音を使用する。

譜例4：「森のくまさん」で使用するコード

●下記の5種類の和音（コード）使って和音進行の骨子をつくる。

注) 借用和音：
へ長調（下属調の属七）

3. 3. 第3段階

へ長調の楽曲の伴奏付けを指導する。

・「ハッピーバースデー」（譜例省略）

この楽曲は保育・教育の場での使用頻度が高く、各自がオリジナル伴奏を用意しておく

ことはとても有用である。

- (1) ヘ長調の和音について説明し、ハ長調との比較をする。
- (2) 前掲第1段階、第2段階の方法に準じて、伴奏付けを行う。

・「山の音楽家」(譜例5)

- (3) この楽曲は、日本語の歌詞が5番まであり、歌詞に応じて伴奏音形を変化させると効果的である。前掲第1段階、第2段階の方法に準じて伴奏付けを行うものの、その後さらに別のかたちの伴奏も工夫する。譜例5には課題の冒頭部分を記載する。

譜例5：「山の音楽家」

●左手の伴奏 (右手でメロディーを弾くかたち)

●左手の伴奏 (別のかたち)

●両手による伴奏 (右手でメロディーを弾かないかたち)

●和音進行の骨子 ベースライン上に音符を加筆する。

3. 4. 第4段階

ト長調の楽曲の伴奏付けを指導する。

・「うみ」(譜例省略)

文部省唱歌であるこの楽曲は伴奏楽譜を入手することも容易であるが、副三和音を使用してやや雰囲気異なる伴奏を簡易に作ることができる。

- (1) ト長調の和音について説明し、ハ長調との比較をする。
- (2) 前掲第1段階、第2段階の方法に準じて伴奏付けを行う。

(3) 副三和音 (II、VI) を用いて伴奏付けを行う。

・「小さな世界」(譜例省略)

(4) 前掲第1段階、第2段階の方法に準じて、伴奏付けを行う。

(5) この楽曲の場合、メロディーの前半部分と後半部分がほぼ同一の和音進行ととらえることができ両方の部分を重ねて演奏することが可能である。二つのメロディー(この場合は楽曲の前半部分と後半部分)を重ねて歌う「パートナーソング」の手法に準じた例として説明する。また、他の参考例として「メリーさんのひつじ」と「ロンドン橋」を重ねて歌うことができることなども合わせて説明する。

3. 5. 第5段階

非和声音について説明する。音楽には和音の構成音以外に非和声音(和声外音)があり、それらが加わることによって音楽がより色彩感を増し、華やかになることを説明し、実感させる。具体的には、以下のようなプロセスで作業を進め非和声音を認識させる。また楽曲構造についても触れる。

・「ロング ロング アゴー」(譜例6)

この楽曲は本学が使用しているピアノテキスト¹⁾に掲載されているもので、学生全員が弾くことができる。説明を分かりやすくするためにこの楽曲を課題として選択した。

以下の作業は楽曲分析(アナリーゼ)の基本であり、これらの作業によってメロディーに非和声音が含まれる場合にあっても的確に和音を判断し、躊躇せずに和音を付けて伴奏できることを理解させる。そのことへの理解は、授業で取り扱わなかった楽曲のメロディーに受講者が独力で和音付けできる力を身に付けることにつながる。また、その後オリジナル楽曲を作曲する段階へ進むための一助ともなる。

(1) まず、音楽を再確認するためキーボードで一緒に弾く。

(2) 譜例6においては和音記号が記載されているが実際の指導においては受講者に各部分の和音を判断させ、和音記号を記入させる。この曲は、左手の分散和音を見ることにより和音を容易に判断することができる。

(3) 右手メロディーの各音符が非和声音かどうかを判断させる。非和声音には刺繍音、経過音、倚音、掛留音、先取音、逸音、保続音などといった様々な種類があるが、本プロセスにおいてはそれらを一括して「和音構成音でない音」=「ぶつかる音」と説明する。ただし、和音構成音を「三原色」とすればそれ以外の「非和声音」は「中間色」または「パステルカラー」のようなイメージとなり、「きたない音」ととらえるのではなく、音楽を構成するにあたって不可欠な要素であることも合わせて

説明した上で、譜例のように非和声音に×印を記入させる。

(4) 譜例のようにモチーフ (α) が敷衍されて音楽が発展してゆく様子や「動機」「小楽節」「大楽節」「一部形式」「二部形式」といった、楽曲構造の基礎の説明をする。

譜例6：“Long Long Ago”

●楽曲分析（アナリーゼ）実習例：（非和声音の抽出、楽曲構造の理解）

3. 6. 第6段階

各和音は、表2に示すようにその調における3種類の機能に分類することができること、言い換えれば、各和音はトニック (T)、サブドミナント (S)、ドミナント (D)のいずれか

表2：和音の機能、カデンツの種類

和音の機能	和音	和音の機能	和音進行
トニック (T)	I	3種類のカデンツ	I-V-I
	VI		I-V7-I
サブドミナント (S)	IV		T-S-D-T
	II	T-S-T	I-II-V7-I
ドミナント (D)	V		I-IV-I
	V7		

の機能を持つことを説明する。また、それらの和音の連結によって生じる3種類の「カデンツ」の連続から楽曲が構成されることを説明する。

4. 該当する授業と受講者について

執筆時において「音楽理論」(1年時後期)と「作曲法基礎」(2年時前期)の二つの授業にまたがって本メソッドを取り扱っており、受講者はこの数年にわたって30名を越えない人数である。どちらも選択科目であるため音楽にとくに興味を持った意欲的な受講者が多い。一方、これらの授業を受講していない学生は伴奏付けに関する指導をほとんど受ける機会がないため力量の差が大きいと考えられる。

今後本学で予定されている再課程認定に伴うカリキュラム改定により、筆者が担当する授業も「幼児と表現1(音楽)」などが新たに加わることとなっているが、伴奏付けに関する内容は今後の授業においてさらに多くの学生が少しでも経験できるように工夫してゆきたいと考えている。

引用文献

注1) 川畑尚子 他 編『ピアノ曲集』、学校法人 大阪キリスト教学院、2014年、p.35

その他の参考文献

1. 長谷川良夫『作曲法教程 上巻』、音楽之友社、1976年
2. Georg Philipp Telemann、山田 貢・須永恒雄 訳『通奏低音の練習 - 歌いながら・弾きながら』、ハルモニア、1977年
3. 池内友次郎、島岡 譲 他『和声 理論と実習 I』、音楽之友社、1980年
4. 池内友次郎、島岡 譲 他『和声 理論と実習 II』、音楽之友社、1980年
5. 島岡 譲『和声と楽式のアナリゼ』、音楽之友社、1985年
6. 竹内 剛、岩間 稔 編『総合音楽講座(8) 伴奏付け』、ヤマハ音楽振興会、1985年
7. 鈴木達也 他『ピアノ・エレクトーン演奏グレード/指導グレード グレードハンドブック 5・4・3級』ヤマハ音楽振興会、1988年
8. カワイグレード認定委員会『カワイ ピアノグレードテスト』、河合楽器製作所・出版事業部、1993年